大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

<書評>三浦慎悟著『動物と人間 ―関係史の生物学―』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, はるか メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017981

書評

三浦慎悟著『動物と人間 ―関係史の生物学―』(註１)

加　藤　はるか

現在の環境問題への関心もあり，日本においても，1990年代後半から「人間と自然との歴史的関わり合い（環境史）」の研究が多岐に展開されている。このいわゆる「環境史」は，「史」と付くが，歴史学以外の分野の専門家による研究も多く，特に生態学，科学や技術の歴史，地理学などとの結びつきが強い。本書は最終氷期から現代にいたるまでの「動物と人間の関係」を，生物学を専門とする著者が「動物側の視点」から描き出したものである。ただし地域的にはヨーロッパが中心に扱われており，著者はその理由として，ヨーロッパで農畜融合の文化が実質的に発展したこと，動物との関係が濃密で，途切れることなく続いてきたこと，あらゆる分野の資料が最もよく残されている地域であることを挙げている（viii-ix頁）。そして著者は，なかでも中世をヨーロッパにおける動物と人間の関係が抜本的に変わり，ヨーロッパの自然観や文明，文化を創り出した源であると評し（5-10頁），「動物と人間の関係」の大きな転換点と捉えている。

さて，評者は環境史的視点を取り入れながら，中世イングランドの農村・農業史を研究しているが，従来の中世ヨーロッパ農村・農業史では耕作に重点が置かれ，長らく動物は「脇役」だった。しかしヨーロッパでは近年，動物と人間が互いの生活に与えた影響，互いが持った幅広い関係にも目が向けられるようになってきた(註２)。その一方日本の歴史学界では，環境史，動物史，植物（植生）史も含め，ヒト中心の視覚・叙述などから十分に脱却できていないのではないかとの指摘が，近年も出ている(註３)。そして「動物側の視点」と言っていることから，本書の著者もまた，従来の研究が軸足を「ヒト」に置いていると見ているのだろう。では本書は「動物側の視点」に立つことで，従来の歴史学（ヒト側の視点）とはどのように異なる見方がなされているのか。今回は紙幅の制限と，評者が本書全体を評すだけの十分な知識を持ち合わせないことから，本書が「動物と人間の関係」の大きな転換点と位置付けている中世ヨーロッパ，具体的には序章と第５章についてこの点を評す。その上で歴史学からは今後どのようなアプローチをすべきかを考える。

「ヨーロッパ文化のなかの自然」と題した序章で，著者は中世の農業革命により起こった，耕作と牧畜を組み合わせた混合農業，三圃制により，動物と人間が「有機的に結合し，一体化した」と指摘する（８頁）。混合農業や三圃制については，これまで農村・農業史において繰り返し語られてきたが，本書は従来の研究には見られなかった生物学の視点を加味しながら，混合農業を解釈している。例えば牧畜に関しては，これまでは耕地の肥料としての側面が強調されてきた。しかし「動物」に軸足を置く本書では，ヨーロッパで中世以来広く飼育される主要５家畜（ヤギ，ヒツジ，ウシ，ウマ，ブタ）が，主要な家畜となった理由を生物学の視点から探る。そしてサイズ，用途，利用法が異なるだけでなく，食性が少しずつずれ，食い分けが成立しており，この５種の取り合わせが絶妙であると指摘する（8-9頁）。確かに，混合農業に家畜が必要不可欠な存在である以上，その飼料や家畜ごとに食べる草のことまで視野に入れて，このシステムを捉えるべきである。しかし「ヒト」が主体ゆえに，従来の研究にはその視点が欠如していたと言える。

第５章は４つの節からなる。5.1「中世前期の農業と家畜」では，中世の農業革命とムギ類の生産性の低さから，森林の開墾による森林減少が起き，ヒグマなど生息数が減った動物とシカやイノシシ，ウサギなどの生息数が増えた動物があったことを，考古学の成果や動物のDNA調査を根拠に論じている。歴史学研究では，人文学の枠外の知見の取入れはほとんどなく，森林減少により減った動物と増えた動物があったという生物学の知見と，生息数が増えた動物は中世に狩猟の対象となった動物でもあるという指摘（208-212頁）は，評者にも驚きであった。これを中世における狩猟の始まりや，人間と動物の関係の変化と直ちに結びつけることはできない。しかし中世の狩猟の始まりについて，著者は新たな視点を提示したと言える。次に5.2「中世における野生動物と森林の管理」では，王侯貴族らの狩猟への傾倒や，国王による狩猟権や狩猟場についての紹介から，食生活にまで話は及ぶ。この節は，これまでの歴史学の狩猟やその他の動物の利用に関わる，様々な研究成果を寄せ集めた感が少なからずある。しかし，例えば中世には狩猟のために設定された猟場であり，必ずしも森林であるとは限らなかった「フォレスト」（218頁）を，「森林」と誤って解釈する歴史学研究もあるが，本書はこの点も含め歴史学の知見がしっかりとおさえられている。また生物学的立場からシカの角を考察し，シカ社会でオスの強さと権威の象徴である角が，王侯貴族が狩猟でシカにこだわる要因に関連するかもしれないとの指摘（221-224頁）も，生物学を専門とする著者ならではで興味深い。

続いて5.3「キリスト教と動物」では，中世ヨーロッパにおいて，人々の生活や価値観の根幹であったキリスト教の自然観，狩猟についてのキリスト教の視点，そこ

から動物裁判，魔女狩りとそれに巻き込まれた動物への迫害などが論じられている。この節は心性史との関わりが深く，ここまでの２節に続いてこのテーマを持ってくるという発想は，「動物」という軸足を持つ本書ならではのもので，歴史学では出てこなかったであろう。しかし信仰など人の心と深くかかわるテーマにおいては，生物学の知見や「動物側の視点」が生きているとは言い難い。動物裁判，魔女狩りなどについては全体像に不明の点が少なくない為，著者がキリスト教的価値観だけを，これらの背景として前面に押し出すのには違和感を覚える。またジャック・ルゴフを中心とするイマジネール（想像界）に関する研究に，直接の言及がなかった点も気になる[註4]。最後に5.4「オオカミへの迫害と根絶」では，オオカミ根絶の歴史とその後が語られている。しかしその始まりは中世後期でも，話の中心は近世以降である。別の章に入れるか，コラムの扱いにした方が，章としてのまとまりを損なわなかったように思われる。

この第５章だけでも参考文献はゆうに200本を超える。農村史や心性史，考古学，図像学，文学などから多角的に語られ，「ヒト側の視点」をしっかりとおさえた上で，人間と深いかかわりを持った動物それぞれの生態や特性，生物学的要因，人間から受けた影響（迫害）といった「動物側の視点」が加わっている。従って，本書は「動物側の視点」から一方的に語られているわけではなく，動物と人間相互の視点を取り入れて，その関係を捉え直しているのである。例えば前述の通り，ヨーロッパの主要５家畜がこの５種となった要因を，生物学的に示したことで，これまで「ヒト側の視点」からだけで捉えられていた，混合農業や三圃制というシステムの全体像が，本書ではより明確なものとなっている。今回，「人間以外が主役」の本書の，一部だが一つの核となる部分を見るだけでも，これまでの歴史学研究がヒト中心であり，しかしヒト以外の視点を加えなければ，自然に関わる事象の全容は見えてこないことが改めて示されている。自戒の念も込めて，歴史学の研究であっても，自然（動物）に触れるならば，生物学や植物学の知見を十分に持ち，人間と自然を対等な役者として捉えることが必要なのである。そしてこれだけ広い地域と時代をカバーした大作を，たった一人で書き上げた著者には敬意を示したい。一方で，評者一人では本書の一部しか扱えなかったように，一人の研究者が様々な地域，時代や分野を取り入れて研究を行う限界も本書からは感じる。今後，自然（動物）と人間の関係の歴史を研究する為に，さまざまな地域，時代，分野の研究者による共同研究が日本でも行われることが望まれ，本書がヨーロッパ中心であったことの是非も，その際に検討されるべきであろう。

注

1．三浦慎悟『動物と人間－関係史の生物学－』東京大学出版会，2018年，842頁。判型Ｂ５，定価22,000（税込）。

2．例えばErica Fudge, 'The History of Animals'(25 May 2006). 参照。ウェブ上で閲覧可能。 https://networks.h-net.org/node/16560/pages/32226/history-animals-erica-fudge（2022年11月20日確認）。

3．北條勝貴「2021年の歴史学界－回顧と展望－　歴史理論」『史学雑誌』131-５（2022年），10頁。

4．イマジネールについては，例えば，池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』名古屋大学出版会，2020年。

（大阪公立大学文学研究科UCRC研究員）

【2022年８月26日受付／2022年11月４日受理　『都市文化研究』編集委員会】